

【原著論文】

情報社会と大学英語教育

南谷 覺正

情報文化研究室

The Information Society and College English in Japan

Akimasa MINAMITANI

Information and Culture

Abstract

This essay is an attempt to search for ways to improve college English education in Japan. It first analyzes several popular fallacies concerning English education, by applying the common understandings extracted from the Hiraizumi-Watanabe debate of 1975. Second, it takes up the long-running argument specifically between the practical, communication-oriented school and the ‘liberal arts education’-oriented school to explore the possibilities for resolving the bitter divide that has haunted the history of English education in Japan. Lastly, the merits of the traditional translation method in English education are reevaluated and reaffirmed as a good way of pinpointing students’ weak points, having them get inside English texts, and expanding their mental and intellectual faculties. All these perspectives are discussed in view of the information society.

キーワード：大学英語教育，情報社会，実用英語，教養，訳読

1. はじめに

本論は，別稿『「平泉=渡辺論争」の再検討』（『群馬大学社会情報学部研究論集』第 21 巻所収）を承けて，高度情報社会の可能性をどのように英語教育に生かせるかを検討するとともに，「平泉=渡辺論争」で十分に論じられていない，実用と教養の問題，及び訳読の意義について考察したものである。

2. 英語・英語教育に関する「神話」

最初に，別稿で纏めた，現代でも有効と認め得る平泉・渡辺両氏の共通認識——1）言語的に異質な

外国語である英語を日本人が真の実用レベルにまで高めるのは、記憶すべきことだけでも膨大で、簡単ではない；2）「実用英語」というとき、「聞く・話す」技能に限定する傾向があるが、4技能はどれも「役に立つ」ものであり、また相互に関連していて、ある技能の進歩は他技能の進歩をも促す；3）基礎文法は必須である；4）大学入試における英語の出題のありかたが、中等教育の英語教育に決定的な影響を与える；5）語学学習は、知的・精神的な訓練になる；6）英語圏に長期間行ったからといってそれで自動的に英語ができるようになるとは限らない——を、現在流布している幾つかの謬見に適用しながら、本論の基本的立場を明らかにしておきたい。

2.1. 英語修得の難しさ

「こうすれば英語は簡単にマスターできる」という新式の方法論が絶えることなく流行するが、これは上記の共通認識1に抵触する。寝転んでいて英語がマスターできたためしはない。覚えなければならないことは山ほどあり、集中した学習努力と一定量の学習時間は決して省けない。語彙1つ取っても、最低基準と言われる4千語を、1週に20語（1日3語）覚えていけば200週、4年を要する。さらにそれぞれの語の特性（語法、コロケーション、ニュアンス、etc.）まで学習しなければ、実戦力にはならず、しかもそれは帰納法で1つ1つ積み重ねていかねばならないものであるから、血肉化されるまでには語義の暗記に数倍する時間がかかる。語彙数を実用レベルの1万語まで上げれば、平均的な日本人で、時々勉強するというペースなら、基礎文法、英文読解、英作文・英会話の学習と併せて、ある程度の英語力を身につけるだけでも、初学時から10年は覚悟しなければならないであろう。

2.2. 実用性

「英語を8年も勉強したのに、外国人に道案内1つできず、英語の手紙1本書けない。学校英語は役に立たない」という難詰をよく耳にする。これは2つの点で公正な批判とは言えない。第1に、共通認識2にあるように、実用性を特定の能力に限定して考えるのはおかしい。簡単な英文が読めるのなら、それは立派に役立っている。第2に、共通認識1にあるように、英語を実用段階にもっていくにはそれなりの学習時間が必要だ。学校で学ぶ時間はその1～2割を占めるにすぎず、残りの8～9割は自助努力で行うのが前提である。学校の授業を聞くだけで英語ができるようになった例はない。

学校教育は全てに通ずる基本に徹しており、道案内表現のような specific な知識は自助努力の領分に属する。学校教育で、道案内や手紙の書き方などの「実用英語」を教えれば、仮に教えた当座は覚えていたとしても、使わなければそうした断片的知識はすぐに忘れ去られてしまう。基本さえしっかりしていれば、「実用英語」は、この情報社会、簡単に自習できるようになっている。

2.3. 英文法

「学校文法を教えるから日本人は英語ができなくなる」という、悪質なプロパガンダによって蔓延してしまった神話がある。これは共通認識3に抵触する。英語母語者（以下、NSEと略記する）がし

ばしば強調するこのイデオロギーの根拠は以下の通りである。言語は最初に文法を学ぶわけではなく、生きた言葉に接する中で、次第に文法の規則が身について行く。外国語学習もその自然なプロセスを踏むべきだ。文法的な制約を意識しすぎると話せなくなる。文法的誤りを犯しても構わないから、とにかくまず自由に発話させるのがよい――

「文法的な制約を意識しすぎると話せなくなる」というのは正しい指摘である。しかし残りの部分は概ね間違っている。周囲で英語が頻繁にやりとりされている環境の中に生活しているのならこうした帰納法も有効であろうが、日本のように英語なしで生きていける環境であれば、教室で意味のよく分からない英語への *exposure* をいくら受けても記憶には残らない。授業時間はゲームやロール・プレイで面白おかしく過ごし、何となく分かって進歩しているような気になるかもしれないが、結局それらのぼんやりした記憶はそのうちに儚くも失われていく定めである。*exposure* なら、教室でやらなくても、インターネットや DVD でいくらでも、より効果的に受けることが可能な時代になっている。

初修外国語である独語や仏語では、基本文法の学習は当然のこととして受け入れられている。アラビア語を文法教育抜きで、ただ *exposure* による帰納法で教え、間違いも正さないままゲームのようなことをしても大きな進歩など見込めないことは容易に想像がつきそうなものだ。日本語では、「文末に『か』をつければ疑問文になる」という文法知識は、演繹的にすぐに役立つ。*fly* の過去形は *flew* であることを教えてから実例に触れさせたほうがはるかに効果的であって、帰納法では、*fly* と *flew* の関係に学生が薄々気づくまでに一体何年かかることだろう？ 文の中の動詞がどれあり、何が何を修飾しているという、いわゆる *parsing* の基礎訓練がないと、英文を組み立てることは決してできない。

福原麟太郎の次の考えを、最終的な結論としてよいと思う。

そもそも英語「学」なるものと実用文法とは全く別のものと見て差し支えない。実用文法は、一体、学問でも何でもない、常識の組織化なのである。…（中略）…だから、実際の手引としては実用文法がもっとしっかり研究されなくてはならない。この頃の英学生の学力が、曖昧模糊としていて、明確さを欠くという批難がありとすれば、それはやはり実用文法的訓練が足りないからである。言語学の理論に合おうが合うまいが、実用的ルールを学ぶ、そしてそれを心覚えに英語の意味を取ってゆくという、昔のやりかたでぐんぐん鍛えてゆく。それが近道である。⁽¹⁾

ただし文法偏重の弊害は認めなくてはならない。かつての中等教育の英語は、文法・リーディング・英作文の3つに分かれ、すべてが文法の進度に合わせるように配列されていた。その結果、頭の中には文法が鉄格子のように嵌めこまれ、それは実際、自由な発話を妨げたし、また「自然な」英語に接した時の衝撃と無力感もたっぷり味わうはめになった。これでは確かに本末転倒である。斎藤秀三郎のように *will* と *shall* の使い分けの問題を学生に100問やらせるというのは、文法偏重の極端な例である。自然な英語こそ本尊であり、文法はそれを支える脇侍仏にすぎない。NSE 英語の現実世界に入れば、そこはもう火事場のようなもので、文法を意識しているようではおよその役に立たない。

伝統的文法教育のもう1つの大きな欠点は、例文が不自然な英語であることが多く、かつ例文数が

少ないことである。説明も不親切だ。あの木で鼻を括ったような文章を、懇切な説明に変え、実地に使える自然な例文を豊富に挙げれば、(実用) 文法教育は大きく改善するに違いない。

さらに文法偏重は、日本人の英語に対する価値配分を現実には即さないものにしてしまっている。現実のコミュニケーションでは、「文法・語彙」と、「発音・fluency」は半々くらいの価値比重であるのに、日本の英語教育では、受験に含まれない後者は軽んじられている。初学時に適正な発音を教えこまないと、矯正は簡単ではなくなってしまう。それが日本の中等教育の最も由々しい問題の1つだ。

2.4. 英文学と英語教育

「学校英語は役に立たない」という批判は、「英文学専攻の教員が、英語を話せず、文学のような役に立たない英語を教えている」という批判と表裏一体をなしていることが多い。

大学の日本人の英語教員は、英米文学、英語学、英語教育学を専攻してきた研究者・教育者であるのが通例である。ただ英米文学研究者の教員が一般教養の英語授業で文学作品を講読するというのは、もうほとんど行われなくなっているはずで、旧制高校的な J. S. Mill, *On Liberty* や Thomas Carlyle, *Sartor Resartus* などの教科書は、1970年代まではまだ使われることも少しはあっただろうが、もうその頃から、学生の興味と読解力には誰が見ても不向きなものとなっていた。

大学の日本人英語教員の多くが、自然で正確な英語を話すことができないというのは事実で、そこは今後は是非とも変えていかなければならないところだ。21世紀の日本の大学の英語教員の資格の1つは、分かりやすく自然な英語を話せたり書けたりし、かつ学生が言わんとしていることを汲み取って、適切に指導できる能力を備えていることである。音声英語をほぼ確実に聞き取る能力がなければならぬのは勿論である。こうした点が実現すれば、日本人の英語は着実に変わっていくだろう。

しかしそれを「読む」能力の軽視に繋げるのは間違っている。英語の新聞、雑誌、書籍が読め、英語圏の文化や諸事情に通じていないようでは、大学の英語教員として失格である。そして、ともすると見過ごされがちなことだが、そうした文献を読めるようになるには、人文・社会科学方面の英語の古典的著作を味読するという地道な apprenticeship を経ている必要がある。例えばたまたま今拾い読みしていた、哲学界における性差別を論じた新聞記事で例証してみると、下線で示したように古典的著作への言及が多くあり、それらについてある程度の知識を持っていなければ、内容の理解が不十分になるであろう。英語圏文化に通じていることは、英文読解の要でもある。

... Socrates was executed for stirring up trouble. Descartes began his “Meditations” with a rousing call to “demolish completely” a long-standing edifice of falsehoods — to uproot our “habit of holding on to old opinions,” and look at the world with fresh, unbiased eyes.

That radical power has inspired many women in philosophy, and much political work. The English philosopher Mary Astell wrote irreverently, in 1700, that an opinion’s age is no guide to its truth, that “a rational mind” is not made for servitude, and that a woman’s obligation to a man “is only a Business by the Bye” — “just as it may be any Man’s Business and Duty to keep Hogs.” From Descartes’s idea that we are essentially thinking beings she deduced a conclusion too daring for her peers: *colleges for women*. Husband-keeping is like

hog-keeping: a contingent duty, not what a woman is made for. ⁽²⁾

そして他言語・多文化を知る力は、自言語・自文化を知る力に準じるわけだから、大学の英語教員の、日本語、及び日本の社会、歴史、文化に関する造詣は、どんなに深くてもそれで十分ということはないだろう。

2.5. Direct Method

「英語の授業は英語で教えるべきだ」というイデオロギーがある。NSE の英語による授業は確かに大学教育に不可欠であり、日本人の学生が、NSE の発音、英語の自然な発話、考え方・感じ方に直接接する機会を持つ意義はきわめて大きい。「日本人英語」では通用しないという認識も涵養され得る。

しかし痒いところに手の届く教育は、英語で行うには荷が重い。文法を教えることも英語では非効率になる。かつて NHK 教育テレビで、英語教育で優れた技術を持っているとされる NSE 講師が、日本人高校生に、現在進行形を理解させ発話させる趣旨の授業が放送されたことがあって興味深く視聴していた。ところが生徒たちは英語での説明のポイントが分からず、戸惑いの表情を浮かべるばかりで、一向に要領を得ないのであった。幾つも用例を並べて帰納的に分からせようとしているようだったが、30 分の努力は徒労に終わった。これは英・英授業の弱点を露呈した典型的な光景である。日本語で「現在進行形」という漢字表記を使えば意味は一目瞭然であり、「現在進行形 = is/are + 動詞の ing 形」と公式をまず示し、その後で練習問題をやれば、理解するのに 10 分もかからないだろう。

また NSE 教員は、日本人の受けてきた教育と育ってきた文化を共有していないがために、得てして心理的な波長を学生と合わせ損ない、日本人の誤りに対して適切な指導を行うことができない。私の大学時代の英作文の授業でも、NSE 教員が、われわれの英作文をかなり綿密に添削してくれたのだが、訂正の多くは、こちらの言いたいこととはかなりずれたものになっていた。

英文の詳細な意味を英語で説明することも難しい。かつてある日本の語学学校のかなりレベルの高いクラスで、NSE 講師が、下に引用した英文を含むディケンズの *A Christmas Carol* の一節を教材に持ってきたことがあった。この作品は英語圏でよくクリスマスに親が子供に読んで聴かせるものだから、イギリス人にとっては子供向けという位置づけなのだろうが、日本人にとっては、多くの箇所に語義的、文法的、文化的な注釈が必要で、日本語であれば説明するのは簡単だが、英語での説明ではさらに謎を深めるだけになり、せっかくの楽しい文章の雰囲気台無しとなったのである。(下線部は日本人の学生には難解であろうと思われる箇所。[] 内が注釈で、日本語であれば約 5 分で説明できるが、英語では 15 分くらいかかり、かつ伝わる保証はない。)

Heaped up [倒置] on the floor, to form a kind of throne, [to 不定詞用法で「結果」] were turkeys, geese, game [狩猟で獲ってきた
兎などの獲物], poultry, brawn [猪肉], great joints of meat [joint は「関節」の意; 「大きな骨付き肉の塊」], sucking-pigs [丸
焼き用の子豚], long wreaths [花輪のように円環状に束ねられた] of sausages, mince-pies [ドライフルーツを入れて焼いた

甘いタルト風パイ], plum-puddings [ドライフルーツを入れた蒸し菓子], barrels of oysters, red-hot chestnuts, cherry-cheeked apples, juicy oranges, luscious pears, immense twelfth-cakes [顕現祭 (twelfth night) に切り分けて食べるケーキで中に硬貨や豆が入っているのが「当り」になる], and seething bowls of punch [酒の一種で熱くして飲むことが多いので seething (煮えた) をつけている], that made the chamber dim with their delicious steam. In easy state upon this couch, there sat a jolly Giant [クリスマスの精霊], glorious to see; who bore a glowing torch, in shape not unlike Plenty's horn [「豊穡の角」 (cornucopia) ; 山羊の角から豊かな実りが溢れ出ているイメージ], and held it up, high up, to shed its light on Scrooge, as he came peeping round the door.

Direct Method は、基礎ができている上級の学生には一定の効果が望めようが、基礎力不足の大学生には、英語だけの教授で、有機的な知識体系を構築させるのは無理である。やはり 21 世紀の NSE 教員は、日本語が堪能で、日本文化に親しんでいなければ十分な働きはできないと思われる。

2.6. Bilingualism

「英語は英語のままに理解する」べきで、日本語を介在させてはいけないという、俗耳にはもっともらしい主張もよく聞かれる。“Thinking in English” とか「英語脳を作る」などとも言われる。つまりバイリンガルを目指せということだ。今日では帰国生も増加し、バイリンガルの日本人も増えてきて、羨望の対象になっているが、そうしたバイリンガル状態は、幼少期から英語圏で過ごすとか、日本でインターナショナル・スクールに通い続けるとかしなければ形成されはしない。つまり家の外では英語を、家に帰ると日本語を使い、それが自然なこととして言語生活が営まれる場合に限って bilingualism は生まれてくる。学校における英語学習だけでは、バイリンガルには絶対になれない。平均的な日本人にとって、英語はあくまで外国語でしかなく、日本語を介在させない反射的な理解もある程度可能であるとしても、《英語による自分》があるわけではない。

日・英のバイリンガルと一口に言っても、実際には百人百様で、両方とも使いこなせるタイプから、両方とも中途半端なタイプ (double limited) があり、また両方とも使いこなせるといっても 4 技能のあるもの (例えば「聞く」「話す」) に偏っている場合も多い。また自分はどちらを本当の自分とするのか分からないという厄介な問題に悩まされることもある。さらに、日本に帰って英語を使わなくなると、英語力はやがて衰えていくというのも厳然たる事実である。NSE の友人との交わりが常にあるとか、翻訳者や通訳者や外交官として仕事に生かせる場合に限って、バイリンガル状態を維持することが可能であるにすぎない。以下は、ある優秀なバイリンガルの学生の述懐である。

Growing up bilingually might seem like a head start in acquiring the skill of translation, but sometimes I wonder if it's not more of a handicap. Knowing and understanding two languages can make one oblivious to all the steps and tools necessary for the reader who is only familiar with one of the languages to produce a worthwhile translation. For example, because idioms in one language already exist in the bilingual person's mind as ideas separate from the specific words in which they are expressed, one can easily forget if they did or didn't exist literally in the other language in which they are equally fluent. A culturally specific issue is, after all,

just an issue to a bilingual person, so it is not always easy to discern whether it is discoursed in the same way in one language as the other. I wonder if this might not be less of a problem for the translator who is unquestionably more fluent in one language/culture than the other. ⁽³⁾

バイリンガルにあっては、英語と日本語の言語領域が別個に存在しており、一方の領域に入り込んで発話している時には、もう一方に同じ概念が存在していることは意識されていないという趣旨である。したがってバイリンガルであれば翻訳は自然に行うことができると言い難いし、またよい語学教員になれるとも限らない。平均的な日本人は、日本語領域に《自分》があり、反射的に、ないし素早い翻訳を介して英語を使うというのが到達できる限度であり、またそれが自然でもある。

2.7. 資格試験

英語の到達度を測定するための外部試験の大学教育への導入が頻繁に行われるようになってきているが、どんな試験だかよく知らないまま導入しているケースが目につく。例えば TOEIC（国際コミュニケーション英語能力テスト）は、鳥飼玖美子氏が指摘しているように、英語コミュニケーション能力を客観的に測定する試験だと考えられている節があるが、実は文法や読解力も試される試験であるので、英会話のクラスを充実させても、TOEIC で高得点を取る保証にはならない。⁽⁴⁾

どのような試験にも長所と短所がある。例えば TOEIC の長所と短所を公平に同数ずつ挙げるとすれば、次のようである。

長所：

- 1) 日本人受験者が非常に多く、日本人の中での自分のレベルについてかなり客観的に把握できる。
- 2) 料金が比較的廉価である。
- 3) 結果が比較的早く通知される。
- 4) 大学で実施する場合、実施日時が大学の都合に合わせて決められ、年に何回でも実施できる。
- 5) データの加工によって、いろいろな角度から分析が可能である。
- 6) 実用レベルであるかどうかを試すために、スピードに関して妥協がない。
- 7) ビジネス関連の英語に照準を合わせており、企業人の英語力測定として向いている。

短所：

- 1) 通常のタイプの試験では、「話す」「書く」の能力が直接試されない。
- 2) すべて選択解答式で、記述式の部分がないため、真の実力が測定されていると言い難い。
- 3) アメリカの ETS に委託して作問してもらっているために、日本の英語教育と噛み合っていない。
- 4) 問題のレベルが通り一遍で、(英検のように) ごく基礎的なことや、高度なことが問われていない。
- 5) 問題を持ち帰らせず解答もなく、どの問題を間違えたかが受験生に分からないため、復習ができない。

- 6) 短時間に多くの問題をつめこんでいて、反射的に解答せねばならず、じっくり考えるタイプの人間に不利である。
- 7) 内容が索然たるもので、(IELTS や Cambridge 英検のような)「教養」的な要素がまったくない。

このようにどの資格試験にも長所・短所があるのだから、特定の試験の得点や実力判定は、1つの指標にはなっても総合的な(実質的な)実力を表すものではない。また特定の試験が標準化すると、そちらに向かって教育が歪められていく危険が大きいし、利権が生じ、腐敗の温床にもなる。日本の英語教育と連動し、学習項目が明示された、Placement Test, Achievement Test, 大学の期末試験などで共通利用できるような(レベル別で、かつ1つのレベルに多数の version がある)記述式の——採点は授業担当の教員が行えばよい——試験を日本でなぜ開発しないのであろうか。そうすれば能力別クラス編成をしても、成績評価の不公平感がなくなるし、何よりも教員と学生の関係が、「裁判官と被告」の関係ではなく、その試験に向かって協力し合う同志的な絆で結ばれることにもなるだろう。

3. 「実用」と「教養」

大学の教養科目としての英語には、明治後半以来ずっと継続して存在してきた対立軸の1つ——「実用」と「教養」——が問題として付き纏う。実用性ということでは、高等学校の科目のほとんどの内容は非実用的なレベルのものであって、それらの知識は教養領域に属しているのだから、英語においてのみ教養的意義が問題視されているのは奇妙だが、それはともかく、「教養」は様々な要素を抱え込んだ概念であり、「実用」と「教養」は両立させることができるのではないかと考えている。

3.1. 「実用」のための英語

2.2.で、実用性は、英語の4技能のどれにも当てはまる概念であるべきで、例えば「話す」ことだけに限って実用性を云々するのはおかしいこと、また、学校の授業をぼんやり聞いているだけで自助努力なしに実用レベルに到達するのは不可能であること、ある個別具体的な状況で使う英語だけを教室で教えても、基礎がなければ根付かず、すぐに忘れられてしまうことはすでに述べた。

1)「読む」2)「聞く」3)「書く」4)「話す」の4技能のうち、前2者が受信能力、後2者が発信能力で、NSEと常時接する環境がなければ、発信能力の維持は難しいが、受信能力のほうは、メディアを通じての維持・発展が可能である。今日では、ペーパーバック革命、流通革命、情報革命により、英語の無尽蔵の文字情報や音声情報に、容易に接することができるようになっている。つまり受信能力に関しては、能力の維持・発展の手段がすでに十分に供給されている状況にあると言ってよい。

これまでの日本の英語教育は、「読む」ことに偏った教育であったが、「聞く」環境が整ってきたことの意義はけっして小さくない。というのは、話される英語は、文章に比べればずっと基本的な構文で組み立てられており、高級な言葉もそれほど使われないので、内容のある話であれば、学習材料として、教養と(4技能全てのための)実用性とを兼備したものになり得るからである。

耳からの情報摂取ができること、新しい表現を聴覚的に覚えられる意義も大である。平泉=渡辺の

共通認識の2にあるように、「書く」「話す」能力も、「読む」「聞く」能力と相補関係にあって、「読む」ことに習熟すればおのずと「書く」（潜在）能力もついていき、「聞く」ことに長ずると「話す」（潜在）能力も高められる。閉じられていた聴覚回路が開かれれば、「話す」能力も開発しやすくなるはずだ。

内容のある英語テキストを「読む」ことに集中した伝統的授業は、教員と学生の関心が噛み合えば、「読む」に特化した「実用性」と「教養」を兼ね備えた授業になり得たし、また現在でもなり得る。ただ古典離れがこれだけ進み、(平均的な)学生の英語の基礎力がこれだけ低下した現状では、古典の訳読は、効果のほどが疑わしい。また教授方法も、訳読一本槍だとどうしても単調なものになってしまいがちだ。それにそもそも、英語テキストとその和訳はすでに山のように存在しており、また学習用に編集された対訳本で詳しい語義や注釈もついているものもあるわけだから、自習すれば済むことをわざわざ学生を教室まで来させて授業する意義が問われることになる。

3.2. メディアの活用

実は上述の問題は英語教育に限ったことではなく、大学のほとんどの教育にあてはまることである。情報化が未熟な時代であれば、貴重な情報を持っている人のところに行かなければその情報を入手することはできなかった。複写機のない時代には、大講堂に学生を集めて、講師が自分の作ったノートを読み上げ、学生たちがその書写をするという講義形式にも意味があった。(つまり学生たちは、講師のノートを一斉にコピーしていたことになる。)しかしコピー機があり、しかも大量のコピーが僅かな時間でできる時代に、そうした講義形式に一体意味はあるのだろうか？

私が大学生の時に感じた疑問もまさにそれで、なぜ講義の内容を最初にコピーして渡してくれないのかというものだった。教員が一方的に講義して要点を板書し、それを学生がノートに書き写すというプロセスは、時代遅れの馬鹿馬鹿しいものに思えた。本1冊読めばすむ内容を、なぜわざわざ教室にまで出向いて切れ切れに聴講しなければならないのか？履修科目を少数にし、その1つ1つの授業で、学生の能力とニーズに応じて様々な文献を読むことを求めれば、そこで学ぶ実質的な知識と洞察の総量は、講義形式の授業を数多く受講するよりもはるかに多くなる。実際、日本の大学生と西洋の大学生の学術的知識量は、高校までは日本のほうが断然多いが、大学生の間に逆転されてしまうと言われている。大学生という知的に成熟した年齢でなら、高校教科書など、数日で読めるだろう。

本を読むことから得られないもの——それを高度情報社会における大学の授業は模索していかなければならない。1つの方法は、文字通り自分の講義を全部文字化してコピーし、あらかじめ学生に渡しておいて自宅で読ませ、授業ではそれを前提に質疑応答を行うというものだ。講義の文字化は時間を取るが、学生の手元に正確な講義録が残るところが長所となる。browsing の点でも紙媒体は優れている。講義を動画で撮影してネット上に置くというのは、分かりやすさでは最善かもしれないが、15回なら15回全体の内容を手軽に browse することは難しく、前の授業の関連箇所にとっと移動することはできない。教室で学生に特定箇所を参照させる場合も、紙媒体であればすみやかにできる。(しかしそれはともかくとして、大学の授業を動画で撮影しネット上に公開するというのは、学術情報を

市民社会に公開するという意味で望ましいことだ。MOOCや「反転授業」などの試みもすでに始動しており、間違いなく教育を変える潮流になろうとしている。）

3.3. 英語の発信能力の教育／学習

本を読むことから得られない価値を授業で実現するもう1つの方法は、教員による講義中心から、学生の主体性を重んじた授業に転換していく、ないし部分的に取り入れたものにしていくことである。大学の一般教養の授業でも少人数のゼミ形式の授業に対する学生の人気は総じて高い。そうした場で学生の発表——プレゼンテーションの技法も同時に学べる——とそれに基づくディスカッションの授業形式にすれば、heuristicsの要素を含めることができる。ただしこのタイプの授業は、教員の側に周到的な準備とよほど豊富な知識がないと、学生が思いつきのありきたりの意見を述べ合うだけに終始する危険が大きく、教員の力量が問われる授業形式である。

話を語学に戻すと、学生にとって一番嬉しいのは、何と言っても「話す・書く」という情報発信行為において達成感が得られる場合であろう。「読む・聞く」の受信能力の教育ばかりだと、「正しい」と「誤っている」の白黒の世界に押し込められ、息苦しい儒教的な雰囲気になるのに対し、話したり書いたりする行為には、自分の創意が籠められる自由と楽しさがある。リーディング主体の授業であっても補助的に取り入れる価値のある要素だと思われる。文法を教えるにしても、語彙を教えるにしても、なるべく日本人が実際に話したり書いたりする場面を想定した発信型の自然な英語の用例をたくさん挙げ、部分的な英作文で学生に発話させてみたり、英会話やパターン・プラクティスのようなものを取り入れて発話訓練をすることは簡単にできるし、実際学生もそうしたことには興味を持つ。また、教員が自分のしたことや考えていること、また時事的なトピックについて、ごく易しい英語を使って話して聞かせるのも、日本人の身に馴染んだ英語とはどのようなものであるかを示してみせる意義があろう。（東京五輪招致プレゼンテーションでの高円宮妃の英語はまさにそれであった。）

「話す」ことは、日本にしようが英語圏にしようが、自分自身で行う主体的行為であるがゆえに、場所には関係しない。また英語圏に行ってNSE相手に話したからといって、相手が誤りを正してくれるわけでもないし、より適切な表現を教えてくれるわけでもない。とすれば、日本にいて話すことを学習するのは、やり方次第では留学よりも効率よくできるはずだ。日常で使う表現の“chunk”——例えば「洗濯をする」はdo the laundry, 「洗濯物を干す」はhang out the laundry, 「洗濯物を取り入れる」はtake in the laundryといったような表現——をしらみつぶしに覚えていくのは有効な準備作業であり、日本にいたほうがやりやすい。ただしそこには、文法的に正しくかつ自然な英語でなければならぬという条件がつくがゆえに、これまでは実行することがきわめて難しかったのである。

また必要な英語表現をいくら覚えても、それは所詮機械的な知識にしかすぎず、なめらかなdiscourseに自然に生成発展してくれるわけではない。西洋の非英語圏の国民なら、語彙の単純な置換でそれがかなり可能なわけだが、日本人にはそうはいかない。生まれてからずっと日本で生活してきた人間は、もう日本語と日本文化に染まりきっており、思考は日本語と日本文化の強い制約を受ける。

そしてそれは、きわめて共有文脈度の高い言語で、繊細で情緒的な要素の多い文化になっており、英語との逐語的な置換性はかなり悪いと言える。そういう日本人が、端から「英語で考える」などということ強いられただとしても、子供のようなことしか考えられないだろう。

つまりは、内容のある英語の発話をしようと思えば、意識の表なり裏なりでの「翻訳」が必要になるということだ。Direct Method での授業においても、少し複雑な答えが要求されれば、もう反射的に答えるわけにはいかず、誰もが母語で考えそれを同時通訳のように翻訳することになる。これは日本語が達者な外国人の発話にも観察できる事実である。

結局は、和英翻訳に帰着する。ところがこの和英翻訳は、高校の英作文とは似て非なるもので、日本語をよく知る NSE と英語をよく知る日本語母語者が鳩首談合、やっとそれなりの英語に仕立てることができる難物である。日本語を解さない NSE は、日本人の拙い英語を聞いて、その日本人が本当に言いたいことを察して英語にすることはできないし、逆に日本人の英語教員も、英語のよほど高い能力を持っていない限り、学生の言いたいことをその場で適切な英語に翻訳することはできない。

さらにもう 1 つの心理的関門がある。同じ内容を話すにしても、日本語と同様、英語にも千差万別のスタイルがあり、自分にあったスタイルを発見しなければ、自分自身からの疎外感が、1 つの思考が次の思考に円滑に繋がっていくことを妨げる。つまり生理的な反撥が生じるのである。

以上のように、日本人が自然な英語を話せるようになるには、幾つもの厄介な問題があるために、これまでは、日本に居ながらにして英語を闊達に話せるようになるのは諦める他なかったのである。

しかし今は状況が少し違ってきている。BS, CS, CATV の英語番組、(インターネット経由で受信できる) 英語のラジオ放送、ビデオ・DVD の映画やドラマ、インターネットの動画、そして無数の音声(映像)付き英会話教材——われわれが学生であった時代からすれば夢のような状況が現実のものになっている。英語字幕を ON にしたり OFF にしたりすることができるものもある。英語音声への exposure は、望むなら 24 時間、日本の自宅にいてすでに可能になっている。なんと言ったのか分かなければ、英語字幕を ON にして再生すればよいだけだ。

表現力豊かで、自然で、かつ自分らしいスタイルの英語を見つけるには、周縁と中心の両方から根気よく開拓していくのが良策である。周縁からというのは、いろいろな英語 discourse に接していて、自分が使えると感じたフレーズをピックアップして覚え、口に馴染ませること、また、すでに英訳されている日本文学やノンフィクションの作品の原本と英訳を比較して、日本的な言い回しの巧みな英語化の知恵を吸収することである。中心からというのは、あるテーマについて 1 分間で話せるくらいの分量の解説や考えを日本語で意識化して書き、周縁からの努力で蓄積した知識をもとに発話体での英訳のドラフトを作り、それを日本語の達者な NSE に添削してもらい、気に入らない部分があれば他の表現を探してもらうなどして推敲・編集を繰り返し、最終的に「これこそ自分の声であり、話していて気恥ずかしくない」と感じられる英語のスク립トを完成させ、それを何度も口に出して誦し、俳優が「役」になりきるようにして、自分の個性にふさわしい英語の言い方に整えていくことである。そして最後にそれを暗んずれば、英語発話の 1 つのしっかりした部材が完成する。そしてこの部材を

1つ1つ蓄積していけば、やがてそれらの知識は、無機的な断片的知識とは違って、自分の心の乗り移ったものであるがゆえに、融合・合成を始め、当初の固定化した表現が、臨機応変、他の表現でも少し言い換えられるように、つまり英語の生きた知識に育っていくはずである。何のことはない、これは、NSEが自分独自の *discourse* を身につけていく仕方と同じであり、最も自然な学習法であろう。

通念とはうらはらに、「読む」ことよりも「話す」ことのほうが知的負荷は少ない。新聞や雑誌記事を読むためにはかなり高度な知識と訓練を必要とするが、日常コミュニケーションの英語は、ごく基本的な知識で何とかなる。大学で英語を必修にする場合、英語レベルが下位の学生で、英書が読めるような見通しが少ない場合には、到達目標として、*oral discourse* の学習——つまり、そうした英語表現を読んだり、聞いたり、書いたり、話したりすること——を中心に設定したほうが良心的であろう。

3.4. 「教養」としての英語教育

現代人の教養の1つとして、英語（日常英会話）が挙げられることが多い。しかし現実には、その回答は「懂れ」から言われているだけで、英語のコミュニケーション能力が実用レベルに達している日本人は実際には稀なのだから、「教養」を社会人のたしなみという意味にとると、現実には即していない回答ということになる。「教養」は複層的な概念である。まずそれらを整理しておこう。

教養には、現在のところ、大きく言って、6つの主だった定義があるように思われる。第1は、「社会人としてのたしなみ、社会常識」で、就職の際に課せられる「一般教養試験」はこのタイプの用例で、そこには、漢字の読み書き、基礎数学、社会的・時事的知識、歴史的知識などが含まれている。最近では、上述のように英語やパソコンが使えることも加えられているようだ。「教養がない」というのは、このレベルについて言われることが多い。

第2は、その高級バージョンで、博学・多識である。露伴やハックスレーは深い教養があったと言われるのはこの意味であり、そこまでいくと、社会的に尊敬される知的達成になってくる。

第3は、大学で「専門教育のための基礎」という意味で使われる用法である。大学教養教育の1つの大きな目的はそれであり、経済学を専攻するための数学、社会調査で利用する統計学、医学のための生物学といったようなものがそれにあたる。この場合、教養は専門の下位に置かれている。教養英語は、英米文学という専門課程に進学するための基礎になることは当然であるし、また医学課程に進学する学生も、英語の論文が読めなければ話にならないので、英語読解の基礎の修得は欠かせまい。

第4の定義は、上のこととは逆に、「専門バカ」にならないために、人間としての幅広い視野を持つための教育ということである。物理専攻の学生であっても日本の古典をよく知っているのはいいことだし、日本文学専攻の学生であっても熱力学第二法則を知っているのは、視野を広げる上で意義のあることだ。日本の大学は、この概念を最も強調しているように見える。種々雑多な教養科目を履修させるのもそのためであろう。英語で言うと、*general education* ということになる。

第5は、英語で言えば *liberal arts* に相当するものである。*liberal arts* の理想は、マシュー・アーノルドの言う “sweetness and light” という美質を身につけるための、平俗に言えば、紳士・淑女になるた

めの character (人格／品格) 養成に置かれる。(札幌農学校のクラークが、着任するとそれまでの校則を全部破棄して、学生に対し“Be a gentleman!”とだけ訓諭したというのも、この趣旨である。) これはある意味で、専門に対する antidote であり、出自から言えば、産業革命以降のし上がってきたブルジョアジーの俗物性 (Philistinism) に抗するための貴族的精神性の堡壘を築くという歴史的意義を有している。教育方法としては、西洋ではギリシャ・ローマの古典を読むこと、日本では、江戸時代であれば漢籍を読むこと、近代初期には西洋の古典を読むことが中心的な方法であった。幸か不幸か、社会全体がブルジョア化し、大学が大衆化していくにつれ、この意味での教養は、あまり意識されなくなっている。しかし理想概念としては、地下茎のようにしぶとく生き続けていると思われる。

第6は、アメリカの liberal arts college を中心に主張され始めた、批判的思考能力 (critical thinking) 養成という比較的新しい定義である。日本では「考える力」と言ったり、「問題を見つけ、その問題を解決する能力」と言ったりもするが、与えられる情報を鵜呑みにしないで、事の真偽を見分け、多角的に物事を考え、様々な情報を結びつけることによって独自の考えを生み出す能力である。これは専門分野においても活用しうる能力であるから、その意味では、第5における、専門と教養の対立を止揚したものになっているが、人格陶冶の理想という agrarian / static な性格から、知力の先鋭化という industrial / active な能力へとシフトして、産業社会・情報社会に適応したものになっている。

この6つの教養概念は、それぞれ教養教育に取り入れるべきだというのが本論の基本的立場であるが、注意すべきは、教養はその人の実生活に活かされていなければ空虚なものになってしまうということ、そしてそのためには、各個人が、上記の6つのステレオタイプに収まらない、自分自身の第7の定義を常に求めていなければならないということだ。

大学の教養教育においては、人文学・社会科学・自然科学がその主要なプレーヤーで、語学は通例、情報処理教育のように、技術的・ツールの扱いがなされている。しかし実際には、語学が教養教育の隠れた屋台骨になっていないと、大学の教養教育は「パンキョー」に堕してしまいかねない。人文学・社会科学・自然科学による教養教育は、講義形式が専らで、上の教養の5つの定義のうち、1と3と4の役割だけを果たし、2や5や6（や7）は等閑視されているケースが多いように見受けられる。旧制高校の教育は、語学中心の教養教育であり、そしてその伝統が新制大学の2年間の教養課程に継承されたわけだから、語学は教養教育の rigorous な血脈を最も濃厚に継承していると言える。徒弟修業のような厳しさを持たせないと、教養教育は「カルチャー」になってしまう。

英語教育は、現在の現実の中で、教養教育にどのように貢献できるだろうか。第1、第2の「社会的たしなみ」や「博学」の意味での教養については、英語の4技能の基礎を学ぶということ、情報の窓を開ける（英語情報へのアクセスを得る）ということで応えられるであろう。第3の「専門教育のための準備」ということでは、「専門的な英語論文を読むための準備」ということで英語の基礎を役立たせることができる。ここでは、とくに「読む」力の養成ということが「実用性」に繋がる。大学・学部によっては、専門科目に、「専門英語」や「原書講読」という科目を設けて、教養科目の英語に上乘せする形で、ESP を教授している。第4の「幅広い視野」ということでは、日本とは異なった英語

文化圏に住む人々の生活や考え方を学ぶことによって複眼的になるという効能があり、またそれによって日本語や日本文化を見つめ直すことができる。第5の「人格の陶冶」とか「高い見識の養成」ということでは、開化期の英語教育ではそれが生きていて、英語の文典を読むことで、紳士・淑女教育が行われ、日本人は、西洋の新しい思想、日本にはなかった感受性や倫理や文藻を吸収したのである。私自身が学生時代に受けた英語教育も古典講読が多く、「高い見識の養成」が目途されていた。やや難行苦行に近いものであったが、それはそれで大学教育らしくて魅力があったし、英語は人間味が感じられた唯一の教養科目でもあった。現代の教室に古典講読を持ち込むことは、いろいろな意味で無理があるが、古典の価値を信じている教員であれば、文法や語法の例文という形で古典からの引用文を少しでも紹介したり、あるいは読みやすいものであれば、リーディング教材の一部として、古典の一節を紹介したりすることもできよう。古典の功德を例証するのは、疫学的証明と似て簡単ではないが、敢えて最も響きを買うような例で試してみよう――

For my religion, though there be several circumstances that might persuade the world I have none at all,—as the general scandal of my profession,—the natural course of my studies,—the indifferency of my behaviour and discourse in matters of religion (neither violently defending one, nor with that common ardour and contention opposing another),— yet, in despite hereof, I dare without usurpation assume the honourable style of a Christian. ⁽⁵⁾

これは「判じ物」のような難解な英文の極端な例である。ほとんどのNSEも、悪文の見本として嘲笑するかもしれない。しかし自分が魅力を感じるなら、NSEの反応を気にかける必要はない。うまく説明すれば、この文章の妙味は、日本人のかなり多くの大学生にも――基礎力さえあれば――十分理解できると思う。著者は自分の主旨はキリスト教であると言いたいのだが、ストレートにそうとは言わない。世間は自分の職業が医者であるために、自分がキリスト教徒とは思っていないかもしれないという譲歩を付け加え、その理由――医学は自然科学で、宗教とは関係ないと思われるから――を述べ、ついでに、ある宗派を擁護し他宗派をこきおろしている世間の風潮を軽妙に皮肉りつつ、悠然と本筋に戻り、畏まって謙譲の意を――微妙なユーモアを籠めつつ――表明しながら (I dare without usurpation assume the honourable style of ...), 自分の宗教はキリスト教である、と言っているのである。著者のゆっくりとした、けれども深みのある精神と思考のリズムに同調できたこと、17世紀のイギリスの代表的な文人と心を通わせ得たことは喜びと自信に繋がるであろう。さらにこの文体が、故意に「判じ物」として屈折させられているわけではなく、輻輳的な思考を表現するための最も経済的な文体であることを了解し、それに引き比べると、自分を含めた現代人の思考は何と単線的で軽々しいものかと我が身を振り返るようになれば、それは古典の持つ鑑^{かがみ}としての功德の1つであると言ってよい。

これよりもずっと英語が易しい古典作品であっても、現在の英語の授業ではテキストにしにくい。しかし古典の面白さと価値が失われたわけではなく、軽佻な時代の病のために当面やむなくそうなっているだけだとしたら、少なくともその面白さと価値を、授業のどこかで少し紹介し、古典への奥の

細道を、将来の日本と世界を担う学生たちに示しておくのも、試みて悪いことではないだろう。

第6の「批判的思考能力」も、それが感得できる英文を教材に用いることによって、間接的に教えることができよう。(話題となった東京大学の英語テキスト *The Universe of English* (1993) は、第5から第6への脱皮という意味での試みであった。) また英語を書く授業であれば、どのようにすれば独自の内容を、説得力のある文章で表現できるかの問題に直面せざるを得まい。しかしそもそも外国語の読解自体、ある言葉の意味を把握するという一事を取っても、その前後関係の文脈から多角的に判断して決定しなければならないのであるから、すでにして高度の批判的思考能力を活用していることになる。(平泉=渡辺論争の共通認識の5。) 外国語の学習は、数学の学習が論理性の強さと正確さという知力を磨くのに対し、総合的、批判的な知力を養うための方法として、古来尊ばれてきた。

このように英語は、「教養」にきわめて親縁性の深い授業科目である。ポイントは、教室で使用するテキストについて、完き自由があるということだ。会話でも手紙でも講演でも評論でも、人文学でも自然科学でも社会科学でも、卑近なものでも高尚なものでも、英語の授業は何でも受け入れることができる——そこに教養への柔軟な対応を持たせ得る自由が生まれるのである。

さらにもう1つ重要なことを付言しておきたい。教養(culture)は元来、宗教の凋落に伴って生まれてきた一種の擬似宗教であるがゆえに、謙虚さが本旨である。そこを逆に、教養を鼻にかけるようになってしまうと、高慢(pride)の罪に陥ってしまう。教養は専門を相対化する機能を果たすが、常に自分自身をも相対化していなくてはならないわけで、これで教養が完成ということはなく、いつも自分の無学、無教養を恥じていなければならない。謙譲さを欠いた途端、prideやsnobbismやPhilistinismの餌食となる。その点、日本人の外国語教員は、つねに「日暮れて道遠し」の感に苛まれる、永遠の学徒(student)に留まらざるを得ないというところ、教養の精神と妙通している。英語が非常によくできた岡倉由三郎のような人でさえ、Stevensonの*Virginibus Puerisque* (『若き人々のために』)がよく読めないと漏らしたという逸話は、外国語に精通することがいかに難しいかを物語っている。漱石の『吾輩は猫である』の苦沙弥先生の醸すユーモアは、漱石自身が自分の能力の限界を正直に認めていなければ生まれてこなかっただろう。日本の英学の伝統にはそれが深く流れている。

英語(語学)のもう1つの教養教育上の恵まれた境遇は、教員と学生が、人間同士という平等な立場で、共通の言葉(テキスト)というものを介在させながら、心を通わせる経験を持ち得ることである。それは、知力だけを使うのではなく、「幾何学の心」と「繊細の心」の両者、人間精神の諸能力を動員したホリスティックな交流となり得るものである。

3.5. 少人数教育の重要性

卑見では、日本の教育には、初等教育、中等教育、高等教育のそれぞれについて、数多くの問題があるが、大人数のクラスが多すぎる——語学に関しては、“Twenty is plenty.”の名言がある——もその1つである。日本の大学の教養教育は、学生にあれこれ幅広く学ばせようとするあまり、1クラスあたりの人数を肥大化させてしまっている。教育の理想は、何と言ってもマンツーマン教育にある。

1人の人間と1人の人間が相対するところに、知的・人間的交流が、深く自在に展開し得る場が生まれる。教える相手が2人なるともう教師の注意は分割され、1対1にあった私的で親密な雰囲気は失われてしまう。20人以上のクラスになると、名前と顔を一致させることさえ困難になり、ましてそれぞれの学生がどのような学生であるか、とても掌握しきれない。教養教育では、教員が個々の学生と人間的な関係を結ぶことが秘鑰で、それがないと教育効果は大きな制限を受ける。

理想をいくら言っても腹は満たされない。大人数クラス制が改善される気配は微塵もないことに業を煮やした教員は、何とかマンツーマンの回路を教室に持ち込もうとし始めるかもしれない。英語の授業の場合は、学生に1人1人に当てていくので、そこに対話は一応生まれるが、いかんせん極めて短い時間でしかない。英文レポートを提出させてそれを添削し感想を書くのも1つの方法だし、小テストを何回か実施してそれを採点しコメントをつけるというのも *personal* な感触を生む。

しかし文字通りマンツーマンの場を作る方法もある。オフィス・アワーを設けて、希望者はその時間をマンツーマン教育として使うことを奨励すれば、熱心な学生はそれを利用してくれる。またネットを介したコミュニケーションも可能になっていて、メールや *Skype* を使えば質疑応答が可能だし、*Dropbox* を使えば、継続的な添削——前述の個々のスピーチの完成など——が手際よくできる。

3.6. 英語を話せる日本人教員と日本語のできる NSE 教員の養成

たびたび指摘してきたように、21世紀の日本人の英語教員は、英文ジャーナリズムや英書が読みこなせると同時に、自然な英語を話せたり書けたりするようではなければならない。逆に NSE の英語教員は、その逆でなければ本当に価値のある仕事はできない。英語教育をよくしていく秘訣は、「科学的」なメソッドに凝るよりも、英語教員そのものをよくしていくことである。英語教員がよくなれば、それが授業に滲み出ることによって学生たちに伝わってゆく。国全体としての語学教育は、海底トンネルを掘るような事業であって、5年で成果を出せ、というような短兵急な戦略で済むようなものではない。腰を据えて取り組むべき息の長い課題だということを、ここでもう一度強調しておきたい。

日本人の個々の英語教員に対しては、時間と費用の掛かる留学などよりも、英語教員の研修センターを設けて、希望者に集中的な「聞く・話す」能力の訓練を施すのが現実的である。短期で英語が話せるようにするには、米ミリタリー方式とベルリッツ方式と和英翻訳方式を合成したものが最も効率的であろう。1人の研修生に対し、日本語と英語をどちらも流暢に話せる NSE と日本人の講師を張り付け、朝から晩まで英語を話させ、直し、正しく話せるまで繰り返し練習させ、自然な英語の呼吸を身体に叩き込む——これを長期休暇のたびごとに1年間行えば、元々高度の英語能力を持っている人材であるから、十分に実用レベルに到達するはずだ。2人の講師が必要な理由は、研修生（教員）の言いたいことはオリジナルな内容であって、それにぴったりの英語を探すには NSE だけでは無理で、よい翻訳を生み出すためのプロセス同様、英語に堪能な日本語母語者の協力が不可欠だからである。

3.7. 英語講義のネット公開

もう1つこの情報時代において国が支援できる画期的なことがある。それは語学の視聴覚教材の独自の開発である。例えば英文法や語彙についての教授は、教室で行えば、年々歳々同じことの繰り返りで、教員もついつい単調となってしまう、学生は退屈する。誰か教授が巧みで人を惹きつける魅力のある講師が、これらを教えるのを撮影し、ネット上に無料公開していつでも見られるようにできないものかと常々思ってきた。現在はインターネットという文明の利器があるのだから、権威づけされた優れた英語教材を作って常時見られるようにしておけば、中等教育においても、塾や予備校に通ってあまり正統的とは言えない英語知識を得るよりははるかに有効な語学教育の資源となるはずだ。動かない高速増殖炉に1兆円以上を投じるよりは、その何千分の1かでも人間と教育に投資すれば、それは、万代を毒する代わりに、万代を教化する無限サイクルとなって働き続けてくれる。英語のみならず、主要外国語全てについてこれを行えば、日本人の民度を上げる上でその効能は測り知れない。

別に英語や外国語に限らなくてもよからう。ありとあらゆる学科、学問についての充実した講義の動画サイトを作って無料公開すれば、中高生が塾や予備校に深夜までいく必要はなくなるし、貧富の差というものもある程度緩和できるようになる。家庭が貧しくて大学に行けない者も、動画サイトで大学の授業を受けて、知識を得、見識を高められるということになれば、それは民主主義を現在の惨状から救ってくれる1つの方便となろう。そうなれば「リアルな」大学教育は甘えていられなくなり、これまでの英語と同様、寒風吹きすさぶ中に放り出され、真の実質を持つべく鍛えられるはずである。

情報社会は様々な陥穽に満ち、われわれを一層下らない人間にする危険を孕んでいると同時に、上手く活用すれば、新しい時代を拓く可能性をも秘めていると考えたい。

4. 「訳読」の意義の再確認

英語の授業形式でよく批判されるのが、伝統的な訳読形式である。しかしなぜそれほど指弾されなければならないのか私には理解できたためしがない。隠れイデオロギーの怖さかもしれない。Direct Method の限界はすでに述べた。「英語だけ」という教授法は、日本語ができないNSEの隠れ蓑になっている気味がある。例えば私がウルドゥー語を学習したいとして、ウルドゥー語も日本語も堪能な教員と、ウルドゥー語しか話せない教員のどちらかを選べるとしたら、躊躇なく前者を選ぶ。ウルドゥー語の基礎文法と基礎語彙を日本語で教えてもらい、日本語での質疑応答が随時許されれば、半年の集中学習で基礎的な会話ができるようになる自信がある。一方、ウルドゥー語しか話せない教員についた場合、臨終まで学習しても、「私は死にかけています」すら、ウルドゥー語で言えないかもしれない。基礎を教えるためにも、また非常に高度なことを教える場合にも、そして教養教育という意味でも、訳読形式は貴重なものを含んでいる。そのことを最後に確認しておきたい。

まず第1に、学生に和訳をさせると、どこが理解できていてどこで躓いているかがCT検査以上に鮮明に映し出だされ、間違っているところを解説し理解させることが最も効率よく行える。これをDirect Method でやるとピンポイントで確かめようがないため、大雑把となり、学生が本当に理解して

いるのかどうか知り得ないまま授業を進めることになる。またある文の意味が分からないという質問に対し、日本語で英文の構造を説明しながら訳すと、よく理解させることができるのに対し、**Direct Method** では、文意を他の英語表現で言い換えることになるため、それで文意は理解できたとしても、元の英語がなぜそのような意味になるのかは未解決のままになってしまう。このように訳読は、日本人教員と日本人の学生との間で、NSE の教員にはできない精密な理解を可能にしてくれるのである。学生の **motivation** が高く、文法・語彙の基礎力がある場合、精選された英文テキストの訳読をマンツーマンで継続的に行えば、読む力は目に見えて上がっていくことは実証済みで、これに勝る方法はないと思う。さらに試験においても、和訳はその学生の理解力を最もよく反映し、他の試験形式ではそれだけの緻密さを獲得することは難しい。英文を読ませ、その大意を英文で書かせるという試験形式では、学生が英文の意味を正確に読み取っているかということと、その内容を的確に英語で要約表現できるかという2つのプロセスを1つの質問で聞くため、学生の実答に間違いがあった場合、どのプロセスに欠陥があったのか判別しにくい。大意を日本語で書かせ、その後にそれを英語で表現させれば、大意把握力と英文での表現力の双方を正確に判定できる。大意が誤っていても、その誤った大意を正確に英語で表現できていれば、その部分には満点を与えるのがフェアと言うものであろう。

第2に、訳読は、翻訳の粗笨な形式であるが、ともかくも翻訳であることに変わりはない。ジョージ・スタイナーの優れた翻訳理論によれば、翻訳プロセスの第二段階は“**aggression**”と名付けられている。つまりテキストの内部への「侵襲」だ。翻訳をするのは作品をよく読むためである、と多くの翻訳者は言う。それはただ、原文を漫然と読んでより翻訳する責任を持って読むほうが真剣に読むというだけではない。翻訳者は、どういう日本語にすると原文の感覚がもっともよく現れるかを模索しながら、実は原文の感覚自体を探っていることがよくある。つまり日本語という母語が、英語の意味を探るための探知針（メディア）となっているのだ。教室で行う訳読では、翻訳のようなデリケートな消息は少ないが、それでも英文の感覚をうまく学生に伝えるためには、かなり念のいった工夫を凝らさねばならないことがしばしばある。

第3に、訳読によって、脳の中の独立した日本語領域と英語領域間の交流回路が生まれ、日本人としてのアイデンティティーを損なうことなく、異文化と健全な弁証法的関係を築くことができる。

第4に、翻訳は人間の諸能力を活性化し、かつ相互に繋ぐ働きを持っている。例えば、たまたま先ほど読んでいた記事の一節で **empathy** の能力が刺激される例を見てみよう。俳優の Tom Hanks が書いた “I am TOM. I like to TYPE. Hear that?” というユーモアあふれる記事で、彼が古いタイプライターに愛着を感じ、今なお使い続けているという内容である。

Close your eyes as you touch-type and you are a blacksmith shaping sentences hot out of the forge of your mind.

Try this experiment: on your laptop, type out the opening line of “Moby Dick” and it sounds like callmeishmael. Now do the same on a 1950s Olympia (need one? I’ve got a couple) and behold: CALL! ME! ISHMAEL! Use your iPad to make a to-do list and no one would even notice, not that anyone should. But type it out on an old Triumph, Voss or Cole Steel and the world will know you

have an agenda: LUGGAGE TAGS! EXTENTION CORDS! CALL EMMA! ⁽⁶⁾

下線部は意味が判じにくいであろう。英語圏の人間にはすぐ分かることでもわれわれにはよく分からないのだ。しかし Tom Hanks の立場に立って「誰も気づかないだろう」という訳を唱えながら想像力を働かせていると、そうか、英語圏の人間はタイプライターで打つ音を聞いてどの文字を打っているのかが分かるのか（それで not that anyone should などと言っているのか…）、という、これまで知らなかったことが見えてくる。このように異文化の中に生きている人間の立場に立って理解しなければ意味が通じない箇所というのは、英文テキストにしばしば現れてくる。学生が訳すのを聞いていると、そこを分かって訳していなければ、教員はそれを訳から直覚する。そういう時、それはどういうことですかとか、著者はどういう気持ちで言っていますかという質問をすると、学生は考えこむ。性急に答を言わずに、訳をいじりながら少しずつヒントを与える——やがて Eureka! の瞬間が訪れる。その時の学生の顔は本当に嬉しそうである。empathy が通じることは喜びを惹起するのである。

実は英文を読む際にはいつもこうした能力をアラート状態にしておかなければならない。そうしないと、文章は文脈の力を利用して、暗黙裡に通ずるところは省略したりひねりを入れたりするから、作者の心との波長合わせは途切れやすく、途切れるとすぐに意味はぼやけ始める。日本語の文章なら波長合わせは比較的簡単でも、英文となるとなかなか難しいもの、しかしそうした修練を積むことで、自文化に硬直した心を少しでもしなやかにできるとすれば、それも教養教育の成果と言ってよかろう。

5. まとめ

「学問に王道なし」とは、英語教育についてもよく持ち出される格言で、「苦勞しないで英語をモノにすることはできない」という意味で使われるが、英語教育法についても辛辣な教訓を与えてくれる。英語教育の目的や方法論について、1つの「正しい」考え方や方法論があるわけではないということだ。換言すれば、英語教育の方法論は、自分で苦勞して編み出すべきものであって、プロパガンダやイデオロギーや理論に乗せられてしまうと、どこか「作り物」の授業になってしまう。

言語はメディアである。しかも人間にとって primary なメディアの1つで、感覚メディア（外界からの情報を把握し媒介する五感と脳神経）に最も近いメディアである。しかしそれは、例えば文字や写像を媒介するメディアである新聞や、映像と音声を遠くから伝えてくるメディアであるテレビとは本性を異にするところがある。新聞やテレビは、メディアというモノの部分と、文字や音声・映像というコンテンツの概念分別がかなり明確に可能であるのに対し、言葉というメディアは、音声による音素の質と組み合わせによって構成され、コンテンツは意味や感情や精神であるとは言えても、そのメディア部分とコンテンツが渾然一体に感じられる。それは、言葉が、感覚がメディアであることがまったく意識されないのに似て、自然に近いメディアであるためだろう。鳥の鳴き声や猛獣の唸り声のような原生的なところから、分節化という進化を経て、きわめて複雑なメッセージを送れるようになっているが、またそうした複雑な思想は、逆に言葉によって育まれてきたものでもある。文字

言語は、音声言語よりは、一膜分、自然から隔てられているけれども、文字というモノ化によって、人間の高度な思想は格段に推進され深化させられて来たのであるから、文字も、人間の文明と内的な黙契を有している。このように言語というメディアは、音声も文字も共に、人間存在や文明・文化と比翼連理の契りを交わしているがゆえに、どちらか一方は無視してよいという筋合いのものではない。英語は読めさえすればよいとか、読めなくても話せさえすればよいという考えは、やはり歪なのだ。情報社会はそのバランスを取り戻す上で、これまでにない機会を与えてくれているように思われる。

日本は島国で世界を知らず、下手をすると世界の孤児になりかねないという、どこか脅迫めいた「憂国の情」がよく吐露される。しかし四方を海に囲まれ、少し行けば海に出られる日本の地勢は、実は国際感覚を鋭敏にしてくれている。アメリカや中国といった広大な大陸の内部に入っていくと、「陸封」状態となり、感覚から世界が消えていくのが体感される。日本人ほど外国からどう見られているかを気にする国民もいないとよく言われるが、それも日本人に国際センスが強く働いていることを示唆している。それがあつた限り、日本人は英語についてそれほど悲観するには及ぶまい。開国からわずか160年、独立を失わず、美しい日本語を保全しつつ、国民の多くが、苦勞しながらも健気に英語に取り組み、一定の成果を上げてきたのは頼もしいことである。すでに英語を読む方面は大変に細やかで洗練されたものに仕上がっており、英和辞典の芸術性はその証である。

現在はまだ、英語の *genius* が日本語のそれと折り合いをつけつつある道半ばであり、何かと混乱が目立つ。しかしあと100年もすればその折り合いもずっと練れたものとなり、日本人は英語を話すのが下手だという現在の自嘲も過去の笑い話になることだろう。自然に英語を話せる人もすでに周りに少しずつ広がっているように見える。それがあつた一定以上のレベルに達すると、閾値が超えられ、心理的な壁は一気に低くなるはずだ。しかしそれは、われわれが為し遂げるといふよりも、日本語の *genius* の成せる業だと考えたほうがいいのであろう。とまれ、多くの日本人が自然な英語を書いたり話したりすることができるようになり、今は埋もれたままになっている日本の良いところが、これまでの日本賛美のように、夜郎自大のこれ見よがし風にではなく、もっと自然な、ゆったりとした呼吸で世界に伝えられ、世界の人々の役に立つようになってもらいたいものである。

——注——

(1) 『福原麟太郎著作集9』(研究社出版, 1969) p. 437.

(2) Rae Langton, “The Disappearing Women” in *New York Times*, September 4, 2013.

(3) Kobayashi Chikako, “Bilingualism, Biculturalism, and Translation” in Lynne E. Riggs (comp.), *Readings on Professional Japanese-to-English Translation* (“The Theory and Practice of Translation II,” textbook at ICU, 2008)

(4) 鳥飼玖美子『TOEFL・TOEICと日本人の英語力』(講談社, 2002) 参照。

(5) Sir Thomas Browne, *Religio Medici*. 冒頭部。

(6) Tom Hanks, “I am TOM. I like to TYPE. Hear that?” in *The New York Times*, August 8, 2013.